

「二」 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

二人は崖^かへ向って歩き、大きな青い影^{かげ}の中へ身をひたした。遠くから見るとそこは暗かったけれど、中へ入ると、日の当るところよりもかえて、ものの様子がこく明に見えた。

——寒いなあ、と浩^{ひろし}はいった。

影のおくには、トンネルが黒黒と口を開けていた。道は登りになってトンネルの上をかすめ、崖の中腹へ出て行った。浩はまだそこから向うへは行ったことがなかった。^{問二}そこには彼^{かれ}をこばもうとする空気があるようだった。

しかし、一たん抵抗^{ていこう}をおしきって向う側へ入ってしまうと、引潮のようなものが作用した。^{問三}浩は胸をはずませながら、

——もう玉浦^{うら}の近くだもんな、とつぶやいた。

玉浦はそそり立ち、彼を影の中に包んでしまっていた。

父親が青島^{チンタオ}の戦役^{えき}から持ち帰った双眼鏡^{そうがんきょう}で、浩は玉浦を見たことがあった。遠い海面がいきなり近づき、波がゆっくり流れていた。潮の色が変る境目にカモメが群れていて、鳴き声が聞えないのが不思議だった。七、八羽いたろうか、大部分は波に乗っていて、なかの一羽か二羽がかわるがわるまっていた。その辺はおだやかだったが、崖の冷たい影のおくには、白い波がきばのようだった。しかし、玉浦の漁村は平和だった。とほうもなく高い崖に両側からはさまれ、三角の浜^{はま}に二、三十軒^{けん}家^けがあって、船も船小屋^{ふねこや}もあった。うしろの山のしゃ面をつたわって陽光がすべりこんでいて、そこだけが明るく、ゆるんだひものような渚^{なぎさ}がかがやいて動いていた。

和ひと浩が海だけが見える地点へ出ると、少し風があった。^{問十三}日なたの海から影の海へ、波がたえ間なく流れこんでいた。光と影の境に岩が二つあって、黒いくいが並んだかっこうに海鵜^{うみ}がとまっていた。

崖のたなから細いわかれ道がついていた。その道を下りて行くと、左側には屋根も見えたが、右側は松林で、

長い幹は険しいしゃ面とえい角になって、海面近くまで立ち並んでいた。そして、海へは陽がさしこんでいて、まるで光のつぼだった。

——あそこにも浜があるぞ。カニがいっぱいいらあ、と和一はいった。

浩は背のびしてのぞいたが、浜は見えなかった。銀色の水が息をしているように思えただけだった。

——なぜこんなところに人がいるのかなあ。

——冬、暖かいだってさ。

——ぼくっちもこっちへ住めばいいいっけ。

——学校は小さいぞ。一年に五、六人しかいないって。

——運動会もやるのかなあ。

——浜でやるじゃあないのか。

——運動場はないのか。

——あるよ。土俵もあるし、鉄棒もあるけえが……。

——いいな、それじゃあ。

——こっちの青年は力があって、すもうが強いって、父ちゃんがいったっけ。おれらん父ちゃんは伊豆の漁場で船がひっくり返って死んだけえがな、ここの衆も一しょだっけ。

——……………。

——その前には父ちゃんがよく連れてきてくれたさ。父ちゃんが酒を飲むもんで、帰りに自転車がグラグラしたや。

——夜か。

——夜さえ。海へ落ちそうでおっかないっけや。

二人は部落へ入り、生けがきの間の路地を歩いた。海面は一段低かったから、海近くまで家があった。そしてはずれの家のまきの木は、傷あとのような白い幹をさらしていた。そこからは、海鵜のいる岩がよく見えた。岩の頂きは、しっくいのように白いフンをかぶっていたので、海鵜ははっきり見えた。十羽ぐらいいいた。一羽残らず陸に背を向けて、海を見ていた。

——魚をねらっているさ。あそこには魚は多いぜ、と和一はいった。

——つりに行けばいいじゃん。

——止め島だもん。

——止め島ってなんだ。

——潮の加減で、行っちゃあ悪い島ってこんだ。

浩には潮ということがよくわからなかった。人もいうように、海には風と関係のない変化があることを彼は感じてはいたが、彼にはわかりにくいことで、わかることをあきらめていた。

——潮で、岩の間を速く水が流れるんだってな、と浩はいった。

——当り前のことをいうな、と和一はあわれむように浩の目を見ていた。

止め島の手前には、岸近くひし形の岩がそり立っていた。岸の岩を魚の胴とすると、尾のような形の岩だった。岸から気まぐれな種が飛んだのだろう、その岩には一本松が立っていたが、枯れてから何年もたった様子だった。難破した船の漁師が立ち上がって死んだかっこうで、その灰色の骨は風によじれていた。枝のさきは、浩が久能山で見たかぶとの角のようになっていた。

——向うへ行ってみっか、と浩はいった。

——さっきカニがいるっていった浜はあっちだぞ、と和一はいった。

問五　そこまで行くと、浩はこわくなった。ともするといじけそうになる自分をはげまして、岩に沿って歩いた。和

一は身軽に歩いていたが、いつも大きく見える彼が、一回りしぼんだようだった。

二つの岩の間にはコンクリートのせまい橋があって、やがてその橋は、垂直な岩はだに馬蹄形ていけいのひさしとなっていた。そこは井戸を縦に断ち割った地形だった。

——生けすに使っていたけえが、波が崩くずいちゃっただって、と和一はいった。

問七　見下ろすと、セメントで工作したあとがわかった。波はガラクタをなぶりものにしていた。そして、一つ所で、おうぎ形にひろがっていた。わき立つあわの上にやわらかな虹にじが静止していた。

和一は馬蹄形のひさしの上を伝わって行った。浩がついて来るのは当然と思っているらしかった。しかし浩は、平気だと自分にいい聞かせてはいたが、

——和一ちゃんと一しょに来るんじゃないっけ、という内心のささやきをおさえることができなかった。

それでも、ひさしをわたり終った和一がこっちをふり向いてくれた時には、浩は力づけられ、笑って見せた。

和一は向う側の岩の間へ入って、見えなくなった。彼が話していた小さな浜へ下りて行ったのにちがいがなかった。それはそうだったが、浩が岩の間へたどり着いて見下ろすと、浜にいたのは和一だけではなかった。彼は二人の少年にはさまれていた。彼らは和一より背が低かった。しかし、和一の方が弱そうだった。彼らにくらべると、和一の体でさえ、日かげの草のように見えた。

浩のうしろでは、波が洞ほらに反響きようし続けていたから、彼らの声はきれぎれにしか聞えなかった。

——……来んていいじゃん。

——いばりすぎらあ、おれらが行った時……。

——元浜のやつら……。

——一人でそう思ったのか。

などという言葉の破片が浩の耳へささった。それから、砂に足をとられもどかしい走り方で、こっちへにげてきた和一が、岩へとりつこうとして、大きく口を開いた。あてどない悲しい顔だった。岩からむしり取られ、和一は自分から転ぶようになっこうになった。そして、二人に蹴けられると、一人の足にしがみついて嚙かんだが、小倉もめんのズボンの上からだったから、相手は大して痛みがはしなかった。うしろへまわったもう一人に背中を蹴られて、和一はのけぞった。

浩がにげようとしてふり返ると、切り立った岩がユラッと動いたようだった。だがにげ始めたら、せまいひさしの形の通路はこわくなかった。もどりながら彼は、波にもまれている海藻そくを見た。行く時には、下を見ないようにして横ばいだったのに……。

問九　浜から部落へ入ろうとして、浩は半てんを着た年寄に会った。その人は浩を見つめながら、ゆっくりすれちがって行った。浩はその人に和一のことをいってみようかと思ったが、切りだせなかった。その人もまた気心が知れなかった。だまっただまま浩は部落を横ぎって、県道めざして登った。県道へ出るまでは、一度も立ち止らなかった。

問十b　彼は、玉浦の一本道を見守っていた。その行く手は、まきや松、岩や屋根をぬって見えがくれしていた。そして、見えるはん圀わに時たま人や犬が現れたが、和一ではなかった。浩は急しゃ面の松林をすかして見たが、底には光のうろこが息をしているようにゆれているだけだった。そのすぐ近くに和一はいる、しかし、見えることはあり得なかった。

やがて浩の視界には、夕方の気配がしのびこんだ。止め島とめしまの海鵜うみのフンが澄すんだだいたい色に染まって、深い

色の海に美しく浮び上がった。波は彫ったように静止して見えた。海鵜の群れもただけしい後姿を見せたまま、ほとんど動かなかった。長い時間においては、なかの一羽がつばさを思いきりひろげ、あたりを見まわし、海へ入って行った。海鵜たちはそんな在り方を少しも変えないまま、だんだん夕闇にまぎれて行った。

——玉浦の衆はキツイ。和一ちゃんだってあんなふうにされた、と浩はつぶやいた。

この秋の運動会のこととも遠い思い出のようだった。その日は特に、和一は目立つ生徒だった。リレーの選手で、五年一組の最終走者だったが、三人目までは三位だったのに、彼が走って一位にした。カーブではスピードをおさえていて、直線コースですばらしく走った。

問十二

その時のことを考えると、浩の胸にはひっそりと蜜のようなものが流れたが、そのこと自体はもう先行きの知れない興奮ではなかった。

——帰って来るかしらん、と彼はつぶやいた。

和一が道を登って来るのがわかると、浩はかけ寄った。浩がだまっていると、

——こんなところ来んほうがいいつけ、和一はいった。

泣いたあとの声だったが、なみだはふくんでいない、すがれた調子だった。

——ぼくのせいかな、と浩はいった。

——そうじゃあないよ。

——どうされたっけだ。

——いいようにされた。おれら痛くてたまらんつけ。元浜の手合は顔を出さなっていやあがって。

——玉浦の衆は、和一ちゃんお父さんと一しょの船で死んだのにな。

——ロクな船方はいないさ。ロクな船もないもんで、ひがみっぽいさ。

浩にとって、和一は身近な人になっていた。その日の昼までは、一しょにしていると胸がはずんで前後を忘れそう

問十二

になったが、夕方にはふつうの上級生になっていた。新しい気持は浩を自由にし、夕闇が二人をいつもより結びつけているように感じられた。

(小川国夫『彼の故郷』)

問一 この文章について答えなさい。

①季節はいつごろですか。次の中からふさわしいものを選びなさい。

- | | |
|----------------|----------------|
| 1 春の終わりにから夏の半ば | 2 夏の終わりにから秋の初め |
| 3 秋の終わりにから冬の初め | 4 冬の半ばから春の初め |

②「浩」は何年生くらいですか。

問二 ———部「浩はまだそこから向うへは行ったことがなかった」とありますが、「そこから向う」は「浩」にとってどのような所ですか。

- | | |
|--------------------|------------------|
| 1 岩が高く険しい危険な世界 | 2 自分が行くことのできない世界 |
| 3 子どもには行くにあたいしない世界 | 4 父との大切な思い出がある世界 |

問三 ———部「引潮のようなものが作用した」とありますが、どのようなことを表していますか。

- | |
|------------------------|
| 1 ほとんど義務的に足を運んでいること |
| 2 ぴんと張りつめていた気持がやわらいだこと |
| 3 自分でも不思議なほど足が前に進んだこと |
| 4 やはり来なければよかったと後かいしたこと |

問四 — 部「海へは陽がさしこんでいて、まるで光のつぼだった」とありますが、どのようなことを表していますか。

- 1 言葉にできないほど美しい玉浦の風景を初めて目にして、浩が心おどるような感動をおぼえていること
- 2 とつ然目の前にあらわれた海のがやきの異様さに庄とうされ、浩の心のおく底にかすかな不安が生まれていること
- 3 殺風景な玉浦の漁村とは対照的に美しく豊かな海は浩にとってみ力的で、思わずぼう険したくなるようなものだったこと
- 4 見たこともない美しい玉浦の風景を見せてくれた和一への感謝が浩の胸いっぱいになり、和一との友情がより深まったこと

問五 — 部「そこまで行くと、浩はこわくなった」とありますが、なぜですか。

- 1 和一が話した潮の加減がどうしても理解できず、水の流れがいきなり速くなる様子を想像すると、えたいの知れない無気味さにおそわれたから
- 2 和一の父のそう難や止め島の話の聞いたたり、枯れた一本松を見たりしたことで、玉浦は自分が来てはいけない場所だと改めて感じ始めたから
- 3 カニがたくさんいるという浜にいざ近づいてみると、多くのカニにはさまれたときの痛さが思いやられて、急におじけづいてしまったから
- 4 玉浦の子どもたちとはぜひ仲良くしたいと思っているが、力があってもうが強いという彼らが受け入れてくれるかどうか心配になってきたから

問六 — 部「いつも大きく見える彼が、一回りしぼんだようだった」とありますが、なぜそのように見えたのですか。

- 1 和一が実は強がっているだけであることをびん感に感じ取ったから
- 2 険しくそそり立っている大きな岩の高さは和一の身長何倍もあったから
- 3 向こうの浜は和一が言うほどみ力的な場所ではないと思い始めたから
- 4 和一に対する信らい感よりも自分の感じているこわさの方が強かったから

問七 — 部「波はガラクタをなぶりものにしていた」という様子は、どのようなことを表していますか。

- 1 すっかりこわされた生けすのガラクタが波にただよっているのを見て、必死について行こうとする浩が和一から対等にあつかわれていないと気づき始めたこと
- 2 がんじょうなセメントをも崩してしまう波の強さを見て、未知の世界に足をふみ入れる試練に立ち向かわなければならぬと浩が心を奮い立たせていること
- 3 人間の営みをしゅんにして価値のないものにしてしまう自然を目の当たりにして、ちっぽけなことにこだわらずなりゆきに任せるべきだと浩がさとしたこと
- 4 人間の力などとうていおよばない自然の恐ろしさを目の当たりにして、見知らぬ土地で自分にも恐ろしいことが起こりそうなばく然とした不安を浩が感じていること

問八 ――部「あてどない悲しい顔だった」ときの「和一」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 親しみを持っていた玉浦の少年たちに悪しざまにののしられ、うかつに近づいていった自分のあさはかさをいやというほど思い知らされている
- 2 なじみの土地であったはずの玉浦が思いがけず自分を受け入れてくれなかったことに傷つき、どうして良いかわからなくなっている
- 3 たびたびおとずれていた玉浦という土地がらの暗い側面をかいま見たことで、人間というものが信じられなくなり、やけになっている
- 4 父とのなつかしい思い出があるはずの玉浦なのにだれも父を知っている人がおらず、自分の記おくのたよりなさにつながりしている

問九 ――部「もどりながら彼は、波にもまれている海藻を見た」とありますが、「波にもまれている海藻」は何を表していますか。

- 1 玉浦の少年たちにさんざん打ちのめされる和一の姿
- 2 だまって遠くに来たことで親に責められる自分
- 3 早くにげようとあわてふためいてもつれる自分の足
- 4 言いがかりをつけてからんでくる玉浦の少年たち

問十 「銀色の水が息をしているように思えただけだった」(――部a)「底には光のうろこが息をしているようにゆれているだけだった」(――部b)の「銀色の水」や「光のうろこ」が「息をしているよう」だという表現は、どのようなことを表していますか。

- 1 玉浦の海には魚がたくさんいて海の底で大きな群れを作って常にうごめいていること

問十一 ――部「その時のことを考えると、浩の胸にはひっそりと蜜のようなものが流れたが、そのこと自体はもう先行きの知れない興奮ではなかった」という一文について答えなさい。

- 2 玉浦の海にはどんな人をもひきつけるみ力があってだれにでも親しみを感じさせること
- 3 玉浦の海には意志を持っていると感じられるえたいの知れない力がひそんでいること
- 4 玉浦の海には海面からは見えない潮の流れが底の方だけではげしくうずまいていること

①「蜜のようなものが流れる」とはどのようなことですか。本文中の言葉を用いて三十字以内で答えなさい。
②「もう先行きの知れない興奮ではなかった」とはどういうことですか。次の文の□に入るふさわしい語句を本文中からぬき出しなさい。

浩にとって和一が□になったこと

問十二 ――部「新しい気持は浩を自由にし、夕闇が二人をいつもより結びつけているように感じられた」ときの「浩」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 自分たちを負かした玉浦の少年たちへの対抗心が燃え上がった
- 2 和一と自分が同じ土地の人間であるという強い連帯感が生まれた
- 3 和一と自分との間に二人だけの秘密ができたことによいしれた
- 4 二人で力を合わせて大きなぼう陰をした達成感に満たされた

問十三 「日なたの海から影の海へ、波がたえ間なく流れこんでいた。光と影の境に岩が二つあって、黒いくいが並んだかっこうに海鵜がとまっていた」(~~~~部ア)、「十羽ぐらいいいた。一羽残らず陸に背を向けて、海を見ていた」(~~~~部イ)、「海鵜の群れもただけしい後姿を見せたまま、ほとんど動かなかった。長い時間においては、なかの一羽がつばさを思いきりひろげ、あたりを見まわし、海へ入って行った。海鵜たちはそんな在り方を少しも変えないまま、だんだん夕闇にまぎれて行った」(~~~~部ウ)という部分から、この文章で「海鵜」はどのような存在として描かれているとわかりますか。

- 1 岩の上で何羽も集まって海を見張り、海のすべての生き物を管理しているかのように思わせる存在
- 2 大きなつばさで自由に世界を駆けめぐり、空を飛べない人間に強いあこがれをいだかせる存在
- 3 昼と夜の世界の橋わたしをして常に止まることなく流れる時間の移ろいを告げ知らせる存在
- 4 あちら側の世界とこちら側の世界の境目に立ちほだかり行き来をはばんでいると強く感じさせる存在

「二」 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

私たちはエビだけでなく、多くの天然資源や食糧^{リョウ}を第三世界で買付け、私たちの「豊かな」生活^{キョウ}を享受している。食糧も商品、資本のある者が買うことができると言ってすませるのならば、何も言うべきことはない。しかし、一方で、日本のネコにあたえられる魚のかんづめの中味に、シャム湾^{わん}でとれた「新鮮^{せん}なビルチャード」(イワシに似た魚)が使われ、スーパーに大量にちん列されている。また、東南アジアの漁村で、日本製のイワシのトマトソース煮^にのかんづめが、やはり大量に売られている。こういうものを見てしまうと、私は私たちの生活^{問一}のありよう、私たちと第三世界との関係のありように根本的な疑問を持たずにはいられない。

中村洋子さんの研究によれば(一九八四年)、フィリピンは、エビ、マグロなどの高級魚を日本に輸出し、サバ、

イワシなど大衆魚かんづめを日本から大量に輸入してきた。魚介類^{かい}輸出の五割、輸入の九割を日本に依存している。これも「外貨獲得^{かく}のため」とだけいえるのだろうか。低所得層ほど、このようなかんづめを食べているという。このかんづめの輸出はすべて日本の商社の手によって行われている。現在、大衆魚かんづめはパプア・ニューギニアに大量に輸出されている。

そもそも、遠い第三世界の海でエビを獲^とり、あるいは養殖^{しよく}し、それを冷凍加工^{とう}して日本に運んでくるには、ばく大なエネルギーが消費されている。日本の養殖クルマエビは、大きく育つまでに、自らの体の一〇倍以上の魚介類を食べる。台湾で、そして東南アジアでのウシエビの高密度養殖も、他の魚介類のぎせいの上に成り立っている。

トロール船で獲られるエビは、直接的に大量の石油を消費する。インドネシアのイリアン海域で操業する四〇〇馬力のトロール船が、年二五〇〇三〇〇日操業し、エビ四〇トンを獲得と想定して計算すると、エビ一キロの漁獲に対し、何と石油一〇キロが必要になるという(宮内、『エビの社会科学』未公開、一九八六年)。この数字には、冷凍加工や輸送に要するエネルギー量はふくまれていない。捕獲するだけで、これだけの石油が使われるのである。これに日本に着いてからの、冷凍倉庫や運送のためのエネルギーが必要であることを考えると、エビは一体いくらの石油を消費することになるのだろうか。

遠洋マグロ漁では「マグロ一トンに石油一トン」と言われていたが、エビはその比ではない。トロールにかかった「くず魚」は、エビの七倍も一〇倍もの重さがある。これらは、海にすてられてしまう。ここにもろく費がある。

「からだの半分は輸入カロリー」といわれるほど、私たちは輸入食で暮らしている。そして、食はほとんど「高級化、ぜいたく化」してきている。良質な動物性タンパク食品であるエビは、その典型食品である。しかし、私

たちの食の高級化の背後には、これまで述べてきたような、さまざまな問題がある。

アジアの零細な漁民（小漁民）たちが一九七八年に、バンコクに集まってワークショップを行なった。そのとき、マレーシアの小漁民はうったえた。

「トロール網は、あらゆる種類の魚を獲ってしまうだけではない。トロール網は、魚の父さん、魚の母さん、魚の兄、姉、弟、妹、魚の子ども、魚の孫、ひ孫、そして魚の卵をみんな獲ってしまう」

零細な漁民たちは、ワークショップの最後に「小漁民マニフェスト」を読みあげた。

「私たちは、外国の強力な船隊が私たちの国、私たちの地域の水域に侵入することに抗議します。また、政府に対して、合併企業が小漁民や地元の消費者の利益にほう仕しないのならば、その設立を禁止するよう要求します」（発展のためのアジア文化フォーラム（ACFOD）、一九七八年）

私たちがエビを食べること、あるいはエビをたくさん輸入することは、第三世界の小漁民たちの日々の営みと深くつながっている。そのことにむとんちゃくのままだ「手を結べ、輸入で世界の国々と。Import Now!」（通産省の最近のキャンペーン）などと声高に主張してよいものだろうか。サバやイワシのたくさん獲れる第三世界の国に、テレビやクルマやコンピューターを輸出し、魚のかんづめを売り、その一方で第三世界の自然資源を、「もっと輸入しよう!」とさけんでいるかのようだ。そして、私たちは未来を予見できぬままにたくさんさんのエビを買い、グルメ志向にはく車をかけている。

輸入エビは食べ過ぎではなからうか？

エビを追いかけ、アジア・第三世界の人びととの出会いの中で、私たちは「飽食」を実感せざるをえなかった。もちろん、エビだけの問題ではない。食べ物だけの問題でもない。だが、エビという身近な題材を、かなりたんだんに追いかけることによって、私たちと第三世界との関係の「歪み」がうかび上がってきた。彼らが獲り、

私たちが食べる。獲り、加工する第三世界の人びとと、食べる私たち、この両者のあいだには、長い複雑な道のりがあり、おたがいの顔はまったく見えない。

ジャワやスラウェシの海辺で稚エビを獲る漁民は、その小さな稚エビが、親エビに成長し、二〇〇〜三〇〇倍の値で、三〇〇〇キロはなれた日本人の食卓に供せられると知らされても、実感はわかないだろう。私たちも、スーパーで、きれいにパックされたエビが、三〇〇〇キロはなれた海辺で、漁民が三角網で獲り、貝がらでていねいにすくい、洗面器に入れて養殖池に売られ、成長したものなどと考えてもいない。

人と人が相対する世界ではない。資本（カネ）とテクノロジーが、私たちと第三世界を縦に結びつけている。バナナの場合、きよ大な多国籍企業による第三世界の直接的支配と、寡占的生産構造がある。エビは大商社や大水産会社が基本的には生産・流通を支配しているといえるが、もっと広域で、企業の数も多い。また第三世界の側も、バナナより長い流通の経路がある。関わる人の数も多い。漁民はバナナ農園の労働者ほど、むき出しの支配を受けてはいない。エビ成金ということばは聞くが、バナナ成金ということばは聞いたことがない。バナナが大農園で、より「工業的」生産が可能なのに対し、エビは広い海、多くの漁民を相手にした産業である。資本の支配力が貫徹しにくい側面がある。

だが、エビもはつきりと養殖化の比重が高まってきている。「工業的」エビ生産は、すでに台湾に見られる。資本・技術の力が大きく作用してくる。

日本の業者は、エビ需要はまだだのびると予測している。価格がさらに下がり、輸入がいまの二倍位までのびることを期待している。しかし海の漁獲はそれほど増えないだろう。否、減るかもしれない。とすると養殖である。

養殖はマングローブ林を破かいする。高密度養殖のためには、生魚をぎせいにした人工飼料が必要になる。大

きな資本と細心のテクノロジーも必要だ。いったいだれがこの競争に勝つのだろうか。マングローブ林や生魚を
ぎせいにされて困るのはだれなのだろうか。

エビというたった一つの商品からさえ、ずい分とやっかいな問題が見えてきた。

(村井吉敬『エビと日本人』)

〈注1〉「さあ、輸入しよう」という意味。通産省とは現在の経済産業省にあたる

〈注2〉少数の大企業が特定商品の生産や販売の大半を支配すること

問一 ―― 部「私は私たちの生活のありよう、私たちと第三世界との関係のありように根本的な疑問を持たず

にはられない」とありますが、「私たちの生活のありよう、私たちと第三世界との関係のありよう」と
はわかりやすく言うところのようなさまですか。同じ形式段落の中の言葉を用いて四十字以内で書きなさい。

問二 ―― 部「私たちと第三世界との関係の“歪み”とは、具体的にどのようなことですか。

1 日本が天然の魚を輸入し続けたせいで第三世界の海域があらされ、日本が養殖の魚しか輸入できなく
なっていること

2 日本がエビを獲ることに費やす石油量があまりにばく大なものになり、第三世界の人人に必要なだけの
石油が供給されなくなってしまっていること

3 日本が高級な食材を輸入することが必ずしも第三世界の利益を生み出さず、かえって日本の飽食けい向
ばかりを拡大させていること

4 日本がテレビやクルマやコンピューターなどの工業製品を第三世界に売り続けるせいで、第三世界で農
業以外の産業が発展しないこと

問三 ―― 部「おたがいの顔はまったく見えない」とありますが、同じことを言っている部分を本文中から
二十字以内でぬき出さない。

問四 ―― 部「バナナが大農園で、より“工業的”生産が可能なのに対し、エビは広い海、多くの漁民を相手
にした産業である。資本の支配力が貫徹しにくい側面がある」とは、わかりやすく言うところのようなこと
ですか。

1 バナナは植物なので条件さえととのえば安定した収穫が期待できるが、エビは動物なので行動がつかみ
にくく、一定の条件のもとでも捕獲量にちがいが出してしまうこと

2 バナナ生産は従事する人人の職種にそれほどちがいがないので賃金を計算しやすいが、エビ産業は出荷
までの過程が多く職種もさまざま、賃金体系も複雑になってしまうこと

3 バナナはある程度日持ちがするので多少生産しすぎてもそれほど損失は出ないが、エビは生鮮食品なの
で日持ちがせず、あまりたくさん市場に出すと大はばな損失が出るということ

4 バナナ生産は区画された農園で決められた方法によって管理することができるが、エビ産業ははん囲を
限定できない自然や人人を相手にしていて、一律に管理することがむずかしいということ

問五 ―― 部「“工業的”エビ生産」とありますが、従来とはちがうエビの生産はどのような問題を新たに生
み出しますか。四十字以内で書きなさい。

問六 現在の日本ではウナギが獲れなくなってきたつあります。なぜこの問題が起こったのか、そしてこの問題
に対してどのようなことができるか、あなたの考えを百八十字以内で書きなさい。

「三」 次の各文について敬語の用い方の正しいものには○を、そうでないものには×を書きなさい。

- 1 ここへいらっしゃるあいだ、雨は降っていらっしゃいましたか
- 2 ご注文のさいにはお名前様をちょうだいいたします
- 3 私の父はいまテレビをごらんになっているところですよ
- 4 結婚式にはぜひ先生をご招待もうしあげたいと思います
- 5 どうぞスープが冷めないうちにいただいてください
- 6 寒さきびしきおり、いかがお過ごしですか

「四」 次の――部1～8のカタカナの部分を漢字で書きなさい。また――部9～12の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

糸を¹タバ¹ねる ²キソ²クを守る 火花を³チ³らす 投票によるサイ⁴ケ⁴ツ

商売のサイ⁵カ⁵クがある ⁶エキ⁶シ⁶ャを建てかえる 鳥の⁷ス⁷ 無実をリッ⁸シ⁸ョウする

あいさつ運動に呼⁹応⁹する ¹⁰干¹⁰害¹⁰に苦しめられる かがやきを放¹¹つ バス¹²が混¹²む

ここは余^よ白^{はく}です。

